

野田物語

民俗学者・宮本常一 ①
50年以上も前に

川間の産業を調査

昭和31(1956)年5月19日、東武線越谷駅からバスに乗り、野田市を経由して、川間村にひとりの民俗学者が降り立ちました。今年、生誕百年を迎えた宮本常一です。

宮本は、柳田國男(1875~1962)や折口信夫(1887~1953)などと並び、日本を代表する民俗学者で、全国津々浦々をくまなく歩き、「体験と実践」を踏まえた民俗調査を行いました。

作家の高田宏は「空前絶後の旅行者で、宮本を超える旅行者はもう絶対に現われないだろう」と、また、実業家であり民俗学にも造詣の深い洪沢敬三は「日本列島の白地図の上に、宮本君の足跡を赤インクでたらしめていくと、日本列島は真



宮本は全国を歩いた/写真提供=周防大島文化交流センター



川間村を調査した報告書/野田市郷土博物館所蔵

常一(講談社)「旅する巨人」(文野真一(文藝春秋)「取材協力」櫻井良樹氏

つ赤になる」と、宮本の行動力や実践力を評しています。

川間村では、5月中旬から6月にかけて樹苗生産を中心とした調査が行われ、その結果が、200ページ以上に及ぶ報告書にまとめられました。

同書には、川間村の産業の移り変わりや村の歴史、また産業の発展にかかわった高名人物も登場するなど、興味深い内容です。

では、宮本常一とはどのような人物だったのでしょうか。

明治40(1907)年8月1日、山口県大島郡家室西方村大字西方(現在の周防大島町)の農家に生まれた宮本は、幼いころから両親のきびしい働きを見て、これ以上父母に負担をかけさせまいと、大正11

(1921)年、西方尋常小学校高等科を卒業すると、家業の農業を手伝っていました。

宮本は当時を振り返り、「何となく都会へ出たいとは思っていたが、何になりたいたいというようなものもなかった」と後に本に書いています。

しかし1年後常一に転機が訪れます。祖母の葬儀で帰郷した叔父・音五郎が、父・善十郎に「大阪へでも出して(常一を)勉強させてみては？」と進言したことで事態は急転し、大正12(1923)年4月18日、大阪へ向かうこととなりました。

善十郎は一人旅が好きで、自ら旅の体験で培った「観察眼」を教えたのでしょ、出発する常一に対し「これだけは忘れるな」と、教訓を語ります。その際、宮本が書きとめたメモは、後に「父の十ヶ条」として、その後の人生の指針となりました。※文章敬称略(次号へつづく)

【資料提供】民俗学の旅「宮本

7月の休日当番医

休日当番医での診療時間
 外科・産婦人科 = 9時~22時 (ただし16時~19時は除く)
 内科 = 9時~16時 (19時~22時は急病センターで行います)

日(曜日)	外科	内科	産婦人科
1日(日)	須藤整形外科(☎7122-1221)	奥野循環器科クリニック(☎7123-7711)	キッコーマン総合病院(☎7123-5911)
8日(日)	キッコーマン総合病院(☎7123-5911)	野田南部診療所(☎7121-0171)	遠藤産婦人科医院(☎7124-7860)
15日(日)	梅郷整形外科クリニック(☎7125-2011)	新村医院(☎7138-2103)	荒井医院(☎7122-5723)
16日(月)	門倉病院(☎7124-5311)	小林医院(☎7122-2835)	小張総合病院(☎7124-6666)
22日(日)	山崎外科内科(☎7122-2359)	丹保医院(☎7129-3557)	杉崎クリニック(☎7125-1070)
29日(日)	西村クリニック(☎7123-0050)	小澤医院(☎7122-3980)	川間太田産婦人科医院(☎7127-1135)

※休日当番医は変更することもあります。受診の際にはテレホンガイド(☎7124-7272:コード6101)、または野田市ホームページ(<http://www.city.noda.chiba.jp/kurashi/04-01-01.html>)で確認をしてください。

急病センター ☎7125-1188

▼内科(小児科) = 19時~22時まで(毎日)
 ▼歯科診療 = 9時~12時まで(休日)

引き締めて——(と)

▼いよいよ夏本番。市内の畑では枝豆が実を結び、出荷を待っています。農家の方も早朝から忙しそうですが、長年の生産者の皆さんの努力で、野田市は全国でも有数の産地となりました▼また、来年6月の開設を目指して、船形地区に農産物直売所「ゆめあぐり野田」の開設が進んでいます。新鮮な野田産の枝豆を購入できるのが、今からとても楽しみです▼直売所のオープンも、関係する皆さんの一つひとつの努力の積み重ねで「実」を結ぶ結果となりました▼いよいよ、次号で市報も十号。改めて「身」を

編集後記

